OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

大阪弁護士会
Osaka Bar Association since 1880

映画「みんなの学校」初代校長と監督に直撃インタビュー

大阪市立大空小学校初代校長
木村泰子さん

映画監督
真鍋俊永さん

大阪市立大空小学校では、様々な特性や個性を持った子どもたちが、「障がい」を理由に、学びの場を分けることなく、いつもいっしょに学び合っています。その大空小学校の初代校長の木村泰子さんと、同学校を舞台としたドキュメンタリー映画『みんなの学校』を製作された真鍋俊永監督にお話を伺いました。

特別支援学級制度は必要ない

―― 「みんなの学校」は全国各地で上映されていて、文科省でも下村元大臣の呼び掛けで上映会が開催されて、300人以上の官僚も観賞しました。この映画はどんな思いで作られたのでしょうか？

真鍋　私は関西テレビで1時間のドキュメンタリー番組を作るために取材に関わりました。もともとこちらの学校は、私の妻であり同僚でもある迫川緑が取材をしていたんです。彼女が障がい児は学校でなぜ分けられているのか理解ができない、納得できないと思って取材をしていると、大阪市内にこんな学校があるという話があり、木村校長を訪ねたのがきっかけです。本当は彼女が取材を続けたかったのですが、会社の都合でたまたま私が引き継いで取材をすることになったわけです。

―― 実際取材をしてみていかがでしたか。

真鍋　実際に行ってみないとなかなか分からないなと。私自身は、そんなに確固たる考えもなく、健常者と障がい児を分けてもいいんじゃないか、特別支援学級の方がいい面もあるんじゃないかと考えていました。でもそれは全然違うということが理解できたと今は思っています。

―― 大空小学校には特別支援教育というものはないのでしょうか？

木村　ええ。だって、おかしいでしょう。大空小学校は開校から9年目には、学校に260人の子どもたちがいて、「支援が必要」というレッテルを張られている子どもたちは50人を超えていました。でも、この50人だけでなく260人の子ども一人一人が、障がいや貧困やネグレクトも含めて、それぞれさまざまな

個性や特性や状況をもっているわけです。公教育の使命は、この260人の地域の子どもたち全員が、いつもその子らしく安心して学べる場をつくることです。その中で、互いの違いを知り、学び合う中で、「生きてはたらく力」を獲得していくんですよね。これって教師だけでは教えられない力だと思います。

―― でも、特別な支援は必要ではないのでしょうか。

一部の特別支援教育のオーソリティーや大学教授は、障がいのある子どもに合わせた特別支援教育が非常に大事やと仰います。でも、特定の障がいがあるとされた子どもをみんなから分断して隔離して指導したとき、この分断で失う「生きてはたらく力」と、隔離した部屋で得る「生きてはたらく力」を比べたら、現状の学校では、失う力の方が断然大きいと思います。特別支援教育という「特別」が邪魔をしているのです。障がいがあるといわれる子どもに必要な支援は「特別」ではありません。そういう子が普通教室にいたら何の支援も受けられないという方がいますが、これは学びの場に対する侮辱ですよ。だって、その子の一番の支援者は私たち大人じゃなくて周りの子どもたちなんです。支援が必要な子どもたちが、他の子どもたちから、そのとき必要な支援を自然に受けられるようになるには、子どもたちが一緒にいること以外に方法はない。今の日本の特別支援教育は大きな勘違いをしていると思います。

全ての子どもの学習権を保障する

―― 大空小学校の教育理念はどういうものでしょうか。

木村　「全ての子どもの学習権を保障する学校をつくる」、これオンリーです。

もし、目に見える「学力の保障」を学校現場が目指すようになれば、やればやるほど学校からしんどい子どもを排除することにつながりかねません。知的学力は無いよりあった方がいいでしょうが、それを目標にすると、しんどい子どもは自分を見失っていくんです。そうではなく、全ての子どもに生きてはたらくために必要な力をつけるのが公立小学校の一番の使命だと思います。だから、貧困であろうが、重度の障がいがあろうが、その子がその子らしく安心して学べる場をまずは全ての子どもに保障する。この目的のためには手段を選ばない。だから、地域の人たちにも、自らの意志でどんどん地域の「宝」が学ぶ地域の学校に入ってもらわないと、教員だけでは保障できないんです。

グローバル化社会を生き抜くための「見えない力」を育む

―― 大空小学校の取材で一番驚いたことはどういうことでしょうか。

真鍋　例えば、急に算数の授業が潰れたりするんです。それは算数よりももっと大事な問題があるからで、例えば校長先生が教室にやってきて学年中の子を集めて、プチ道徳というか、「今日こんなことがあったけど、みんなはどう思う?」みたいな時間が始まる。そういうのが週に1回ぐらいはどこかで起こりました。学習指導要領に沿った算数の授業をすることが一番大事だと思っていれば、そんなことはできないんでしょうけど、子どもたちが人生を過ごしていく上においては、こっちの方が大事なんだろうと思います。

―― そのような教室はどのようにすれば作れるのでしょうか。

木村　答えは一言、「教員が授業を変える。」だけです。大空は明確に「見える力」と「見えない力」を分けて考えます。学力調査の結果、点数に表れる力が「見える力」です。でも、子どもたちが10年後、20年後社会に出て、自分が自分らしく国際社会で自分の言葉で語れる、そんな社会の一員となるのに必要な力は「見えない力」です。大空では、この「見えない力」を「四つの力」として大事にしています。それは「人を大切にする力」、「自分の考えをもつ力」、「自分を表現する力」、「チャレンジする力」です。この「四つの力」を自分なりに獲得していれば国際社会で通用すると思うのです。45分の授業の中でこの「四つの力」をどれだけ子どもたちに獲得させられたかということが、大空の教員の自己評価なんです。

―― 映画でも非常に賑やかな授業でした。後ろで大きな声

あなたを一人にしない　弁護士があなたのもとへ
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248

を出したり、教室から走って逃げて行ったり、そんな騒がしい学校で本当に子どもが学べるのでしょうか。

木村　教室を出ていく、ひっくり返っている、これがとても悪い行為のように一見みんな受けとめます。そのようなことはないですか。でも、子どもにこの行為をさせる原因を作っているのは、実は授業者なんです。「出ていく子が悪い、出ていく子が邪魔や、だから周りは勉強できない」、この発想に私たちは絶対に立たない。先生が、出ていく子が悪いという発想に立つと、ほかの子どもたちも出ていく子に×をつけます。自分たちは○、この子らは×…先生がそれをやってしまうのは、学校の従前の悪しき文化です。でも、先生が、しまった、何で出ていったんやろうなと思って、「何で出ていったんかな」と周りの子どもたちに相談したら、周りの子は分かっているから、「そんなん今こんな勉強しんどいもん。あいつ絶対分かれへんから、イラついて出ていったんちゃうか」と。そこに立ち返れへんかったら、子どもらに「四つの力」なんか育たない。先生の言うことを聞くことだけが学校での学びの目的になってしまったら、日本の社会は成長しないと思いませんか。絶対グローバルについていけないでしょう。だって、自分の考えを何も言われへん大人に育つわけやから。

真鍋　まさに今の社会はそうなってますよね。学校だけでは無く、会社も含めた社会全体が権力を持つ人の決定には異論を出しにくい仕組みになっていませんか。「自分の意見を言いましょう」とか言いながらも実際は先生の考える正しい枠からはみ出すことを許さない教育現場で、その素地が作られているように思います。

木村　大空では、子どものすることが何でもOKと言ってるんじゃなくて、大人の出番を間違えるなと言ってます。大人が出るところはとことん出る。だから、例えばみんなが集まる全校朝会とか全校道徳のときに大事なことを学びあうのです。例えば「ビーッ!」とか「キャア!」と言って走る子がいると、みんな必ずその子の方を見るんです。そのときに私が「何で見たん?」と聞くと「あの子が走るから見た」。でも、「ここに居ててもしろない、安心でけへんから走ったんやろう。自分がもし今しんどいな、よし逃げようと思ったときに、みんなにバッと見られたらどんな気する?」と聞くと、子どもらは「嫌やな」と。「あの子が落ちついてないときにあんたらが見たら、余計落ちつけへんようになるわけや。」「信頼できる大人が近くにいないときは、ほっといたらあかん。でも、大人がいるときは安心して大人に任せたらいい。だから自分は自分の学習にしっかり集中し！　」と言います。子どもたちには、必然的に集中力がつきます。

――　見える力の方はどうですか。

学力調査に関してはどうでもいいんですけど、大空の9年目の学力調査の結果は全国一の秋田県より上でした。見えない力をとても大事に学びあってきたことで、結果として見える力はついてきているんです。でも、見える力を優先的にやれば、結果として見えない力はつかない。目的が違うから。

――　たまたま特別支援学級の対象の子どもがいなかった学年があったそうですね。

木村　その学年はいつも静かな授業をしていました。みんな一応先生の言うことを聞く。でも学力調査の結果で見ると、大空の8年間の中では、その学年が一番低かったです。

――　文科省の学習指導要領ではまさにこの「見えない力」を伸ばすことを目指していますよね。

木村　「みんなの学校」が大事にしていることは、文科省や大阪市が出している教育指針から何一つ外れていない。だから、下村元大臣や文科省の特別支援教育課の課長さんと話しても、何一つ違和感がありませんでした。

たった一つの約束とやり直し

――　大空小学校ではどんな校則があるのでしょうか。

木村　校則は一切ないんですが、「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」というたった1つの約束があります。学校というのは、先生に勉強を教えてもらう場所ではなくて、人と人が学び合う場所です。人と人に対等な関係が成立しなければ、当然学びの本質なんか生まれないですよね。先生と子どもが、トップダウンじゃなくて互いに学び合える関係をつくる。子ども同士も強い子も弱い子も、それぞれの違いを違いとしてお互いが学び合えるために一番必要なのが、この約束だと考えています。でも、これ難しいんですよね。

――　たった1つの約束を破ったらどうなるのでしょうか。

木村　この約束を破ったら、校長室に来て自分がやったことを振り返って自分で考える「やり直し」をします。例えばある子どもたちがけんかを始める。けんかは対等でも、力の差があれば、力の強い子が「おまえなんか」と言って殴ってしまう。この時点で教員や大人はついつい「この子を殴ったおまえが悪い」とジャッジしてしまう。ジャッジされた子どもは謝る。そして「謝ってもらったからもういいでしょ」となって、これで解決したように思う。でも、実は子どもの心は納得しないものを持って家に帰っていて、それを家で吐き出す。すると、親が家庭というフィルターを通して学校にやってきてややこしくなる。今の学校は、これでもめていることが多いと思います。そうなると、学校は子どもを見ないで親を見る。今、どこの学校でも校長先生たちが困っているのは親なんです。こっちを立てたらこっちが立たない、両方立てようとしたら自分が潰れるわけです。そのトラブルの中で、子どもの学びなんかどこかへ飛んでいってしまいます。精神的に病んでいる親への対応は別に考えないといけないですが。

子ども同士でトラブルがあるのは悪いことじゃないんです。子どもが育つ中では当然のことですよ。そのトラブルをどう生きた学びに変えるかです。それが「やり直し」です。

――　映画の中で、いつも暴力を振るっている子どもが「もう暴力を振るわない」と涙を流して誓う場面もありました。

真鍋　「その一瞬一瞬は本物」と木村先生が言っておられるシ

ーンがありますが、「やり直し」の中で毎回子どもは自分で反省して、こうなろう、こうなりたいと思っているのは本当だろうなと。でも結果を見ると、3時間後にはまた校長室に来て、別の新たな反省をしてたりします。「さっきのは何やったんや」というふうに思わなくもないですが…（笑）

木村　それが子どもやって（笑）。何度やってもいいのがやり直しなんですよ。やり直しの力が大人になってから生きると思います。一回も失敗せんと6年間終わって大人になってドンと何かが来たら、どうやってやり直したらいいか分かれへんでしょ。

担任制度の廃止

―― 最近、学級崩壊が問題になっていますが、大空小学校ではどうでしょうか。

木村　しょっちゅうです。素直に自分を出す子どもがいれば学級崩壊なんか常ですよ。ただ、1人の先生が学級を担う状況だと荒れることが多いです。そして信頼という土俵がないところで荒れると崩壊し続ける。だから、信頼できる大人をどんどん入れかえます。大空では担任制度をやめました。「担任」ではなく「担当」と言ってます。「任」というのは学級を任される、すなわちあなたの学級王国をつくりなさいということになるんです。でも大空ではクラスを担うなんていうことは教師のおごりやから捨てようと。他の学校の教員に「あなたの子どもは?」と聞くと「40人です」と答えると思います。大空では、「たまたま自分がこのクラスを担当しています、でも自分の子どもは260人です」と答えるでしょう。ここの違いです。

最近考えていること

―― 映画の上映会の反響をどう思っておられますか。

真鍋　迫川もよく言ってるんですが、特別支援の教育をしている人たちから「よかった」と言われる事も多くて、でも、この映画はもともと健常者と障がい者を分ける特別支援学級自体がおかしいという思いから作ったのです。なのに難しい子への接し方とかだけを見て「よかった」と言われてて、作品がいわんとしているところは伝わっていないのかなと感じます。こんなノウハウがありましたという見方ではないはずなんだけど…と最近思ってます。

―― 木村先生は退職されて、今どんな活動をされていますか。

木村　この1年間でもう100カ所ぐらい講演にいきました。教育委員会とか研究センターとか教育長とか校長会が少しずつ動き始めています。今の状況を変えたいという空気は広がりつつあります。

弁護士に求めること

―― 最後に、弁護士に対して求めることをお願いします。

木村　人権侵害を退治してよ!ってものすごく思います。現場で子どもがどれだけ踏みつけられているか。大空のことしか知らない自分でしたが、周りで起きている現状は、想像を絶します。本当に子どもが何人死んでるか。子どもは死んでるし、たかが一介の校長の一言で学校に来させてもらわれへん。その校長はそのうち退職して終わりですよ。子どもが死んでしまったら学校の言い分だけしか残らないでしょう。だから、親は自死した親たちの会をつくってそこで運動していくしかないんですよね。死なんで済む命がいっぱい死んでる、殺されてますよ。自分の子どもやったらと思うと、すべての大人が変わらなければと考えるはずです。

相模原の事件は、あまりにも残忍で許しがたいものですが、この報道を目にしたとき、中学生になった大空の卒業生がつぶやいた言葉が昨日のことのようによみがえりました。「校長先生、ほかの小学校から中学校に来た子らが、○ちゃんや○ちゃんのことを『なんであんなやつらがいっしょに教室におるねん。学校に来る意味あるんか。生きてる価値ないやろ。』って言う。なんでそんなふうに思うんやろ。そんな目でしか見られへん子らって不幸やな。」って、大空の職員室に帰ってきてつぶやいたのです。大空ではいつもいっしょにいるのがあたりまえの中で、育ち合っています。となりにいる友だちが、勉強がわからなくても、言葉が出なくても、よだれを流していても、それがその子のありのままの姿として、いいところがいっぱいあることを身体で感じ合っているのです。いつもいっしょにいるからわかり合える。だから自然に身体が動き、困っている友だちを支える姿があたりまえにあるのです。

二度と同じ不幸なことを起こさないためにも、子どもの周りにいるすべての大人が、自分の中にある差別や偏見の目を変えることが必要です。そんな大人の姿を子どもは見て大人になります。弁護士さんには、そんな大人の社会をつくるリーダーになっていただきたいです。

（Interviewer:西原和彦、加藤慶子／Photo:髙廣信之）

あなたを一人にしない　弁護士があなたのもとへ
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248